書評

森一郎氏著『源氏物語の方法』

藤河家利昭

本書については已に幾つかの書評が出され、それに対する森氏御自身の感想も示されている（「源氏物語の方法」ノート、甲南国文第十七号）。あらためて論ずる余地もなく、書評という任の重さにもたえ得ないこと言うまでもないが、重複をいとわず、私なりに氏の提出された問題の大きさを受けとめてみたい。

本書は、昭和三十年から四十四年に至る十五年間、国文学攷を初めとする各誌に発表してこられた十七篇の論文を収めている。その中、四十年以降のものが十篇あり、殊に最近の氏の意欲的な問題提起の仕方と旺盛な研究活動を窺うことができる。

森氏の源氏物語研究の一貫した態度は物語読者の立場において源氏物語の世界の論理を解明するにある。「この物語を読む時の読者の素直な興味」に発した問題設定の仕方は、物語制作が読者（女性の）を抜きにしては考えられないという事情によって、方法の正当性と有効性をもっていよう。そして、物語の論理を忠実に追うことによってここに析出された物語の方法の数々は、多角的な観点の導入と相俟って、読みの深さと確かさに裏づけられてもいる。物語の論理に密着すること、それは物語の多様な世界に身を委ねることであり、このことが同時に氏の研究の世界の豊かさを生み出していくようである。

論文の配列は、初めに序の代りとして作者の人間像が論じられ、以後物語の進行の順に並べられ、終りに物語全体の構成が見通されて締括られている。また最後に狭衣物語の方法についての一篇が加えられている。これらは内容からして大体四つのグループに分けられるように思う。

(イ) 一～四は長篇としての物語の主題を把握することに中心がある。

「一、紫式部の宮仕え生活と源氏物語」は、紫式部日記によって、彰子後宮の俗物性に対する式部の不満を見てとられ、逆にその中での三人のロマン的な女房との人間的交流が物語の夕顔・女三の宮・浮舟の人物像の詩的ローマン性を形象したとされる。

「二、桐壺巻の高麗の相人の予言について」「三、桐壺帝の決断」は、桐壺巻の光源氏に関する予言について、従来の説が予言全体で帝でもなく臣下でもない准太政天皇を意味するというのに対して、花鳥余情の説を見直され、予言の前半「国の親となりて、帝王の上な

き位に……乱れ憂ふることあらむ」の中に已に准太上天皇実現と須磨退居の意を含むという新説を出された。また帝の判断について、帝はこの予言の真意が分らず「乱れ憂ふる」によって源氏に臣下の道を歩ませ、後半の予言「臣下の相でもない」は無視した、それは帝が当時の政治的状況によって皇子にすることが好ましくないという自分の判断にひきつけて解釈したからであると説明される。が、氏の説の場合でも、予言が「臣下でもない」というにもかかわらず、帝が明快に臣下の道をとらせた、それが源氏の宿世に奉仕するという構想は別として、帝のその場での決断の根拠に疑問が残るように思う。「四、「帚木の並び」の主題性をめぐって」は、主として空蟬の物語の主題を、中の品、受領階級の女としての現実的基盤に即して捉えようとされたものであり、一と共により作者の側に視点をおいて論じられている。

(ロ) 五～八は主題との関わりにおいて構想の変化を跡づけようとされたものである。

「五、二条東院造営」は、玉鬘巻に先行して澪標巻の時点で、源氏に養女を迎える意向のあったことを、須磨・明石からの帰京後の政治的・恋物語的世界との関わりにおいて明らかにされた。「六、源氏物語の方法」は、絵合巻における指示語の使い分け、頭中将の、須磨巻との描かれ方の相違によって、源氏と頭中将が読者側にとって敵と味方の関係に立つという物語の枠を確認された。ここには已に構想の変化を跡づける方法が後の人物造型の方法の解明に応用されていく素地がある。

「森氏の本領を最も発揮し得ている論考の一つに「七、玉鬘物語の構想について」があげられよう。玉鬘が人々の意表をついて鬚黒のものとなったのは、玉鬘とそれをとりまく蛍宮・冷泉帝・鬚黒・式部卿宮等の人物のおかれた各々の情況からして、そうなる他はない必然だったのであり、それが結局は源氏の栄華に奉仕せしめられるという物語の仕組みを解明される。「八、藤袴巻末をめぐって」は七と相俟って、源氏に対する玉鬘の身の処し方への讃辞を通して、玉鬘物語がもつ光源氏の色好みの物語としての性格を浮かび上がらせられた。氏は物語の論理を忠実におさえ、しかも可能な限り様々な場合を想定された上で、作者の意図した必然の糸をつかみ主題を確定される。このような執拗な追究が独得の説得力ある文体をもたらしているようである。氏の源氏物語の受けとめ方は、玉上琢弥博士の、物語の書かれた部分は書かれざる部分によって支えられているという考えが出発となっている。ここでは表現の背後にある光源氏の公人としての性格がもたらす政治的事情が物語の動きに大きく関わることを通して、この物語の立体的な構造をも明らかにされている。

(ハ) 九～一三は第二部の女三の宮事件をめぐる人物、またその造型の方法が論じられている。本書の中心もここにあると言えよう。

「九、女三の宮降嫁の事件」は、女三の宮降嫁によってもたらされる紫上の苦悩に主題があり、併せて心幼ない女三の宮を包む光源氏の成長し深まった色好みを描くことにあるとされる。ついで「一〇、女三の宮事件の主題性について」は、柏木との密通事件による女三の宮の受苦という女の悲劇に主題を見出される。この事件は、紫上に苦悩を与えた女三の宮がそのまま六条院に留まることへの女性読者の反発に基づくと言われる。女三の宮事件が女三の宮の女人の悲劇であるとするならば、作者は何故かくもその心幼ない性格を強調

せねばならなかったのであろうか。終始理想的に描かれ続けてきた紫上に背負わされる苦悩は分かる。しかし、作者によって心幼ない人柄と決めつけられ、読者からもつき離されかねない女三の宮はあまりに救いようがない。このような未熟な人格の上に紫上の苦悩のような重さを荷わせることができるとは思えない。女三の宮の造型とその悲劇は、第二部の世界においてだけでなく、作者の愛の認識の仕方においても複雑な問題を孕んでいるように思われる。

「一一、女三の宮創造」は、女三の宮の性格の造型意図を第二部の世界との関わりにおいて究めようとされたものである。宮の幼稚さが後見役として源氏を婿とし、柏木の密通をひきおこし、周囲の全ての善意の人々を不幸に陥れたとして、第二部の「栄華のかげにくりひろげられる内面の暗い世界を主導する人物として造型された」と言われる。ここでは表面の栄華の内奥にひそむ暗さに主題を見ておられるようであり、人物よりも世界の方に比重がある。

この第二部の主題のありかを論証すべく、「一二、源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」という画期的な論考は書かれた。人物造型が主題性に奉仕せしめられるという新しい観点の導入によって、絵合巻と須磨巻の頭中将の変貌をはじめ様々な例が挙げられ、殊に柏木と女三の宮の性格が密通事件を機として、柏木は「付着的造型」による「矛盾的変貌」を、女三の宮はその幼稚さが六条院の円満な関係をかたちづくることから破滅への墓標となることによって「意味的変貌」を遂げているとされる。また人物造型の変化が「主題の進展・変化を示す信号」（「一三、源氏物語の人物造型の問題」）ともなると言われる。氏の方法の確かさを示す整然とした論であり、その正当性は恐らく揺ぎないであろう。だがそのあまりの正当性はこの物語の価値を測定するときどこに位置づけたらよいのであろうか。

㈡　一四～一七は長篇の構成の方法が論じられている。

「一四、源氏物語の構想の方法」は、竹河巻冒頭の記事が御法・幻両巻に玉鬘の出ない理由を示すこと、匂宮・紅梅・竹河の三帖が薫・匂宮の人物像を対照的に描き分けること等によって、この三帖が宇治十帖の序となっていると説かれる。物語に個有な方法を導き出すことがここでは成立論へのあざやかな切り込みとなっている。このような構想の方法に文学的意味づけをして整理したのが「一五、源氏物語の方法―回想の話型―」である。その内容は「一竹河巻頭の回想―過去の裏づけ（その一）」に始まり「八読者の回想的読み―夕顔巻のもののけの正体。賢木巻の「兵部卿宮」―」に終わる八つからなる。これらは基本的には回想によって過去がリアリティを得るという認識に立ち、例えば「二橋姫巻の回想―過去の裏づけ（その二）」では、橋姫巻の八の宮に関する叙述が、賢木巻で書かれなかった八の宮擁立という政治的事件があったことを明らかにすると説かれる。しかし、回想という言葉はより現在のためにあると思われるし、また過去と現在とを直線的に結んで考えようとされるのは、氏の構想論からしても矛盾するように思われる。

以上のように、森氏の源氏物語論は主題・構想・人物造型の方法・長篇の構成の方法等の多様性をもっているが、その中に主な二つの方向を見ることができる。一つは、主題・構想の把握の仕方に見られるように、部分の読みを深め充足していく方向であり、一つは、人物造型・構成の方法の把握の仕方に見られるように、全体を展望し得る方法を探究していく方向である。これは大まかな分け方

に過ぎず、二つはいわば表裏の関係にあるが、いずれの場合にも根底に「確かに言えることだけを論じたい」という強烈な志向があり、立論の基礎を強固なものにしている。氏の提示された方法は読みの深さに裏づけられ、しかも主題に肉薄するものであることによって、初めての本格的な源氏物語の方法論と言えよう。氏の方法論が今後体系化され、御研究が益々大成されることと共に、我々後輩を導いてくださることを念願する。私の浅学のため、的外れ、非礼があるかも知れないことをお詫びする。

（昭和四十四年六月三十日刊。A5判、三二七頁。桜楓社刊。一、五〇〇円）

―広島大学大学院学生―